

不登校の経験とその後

高橋 亨輔（たかはし きょうすけ）

1.小学生の頃

僕は小学4年生の秋頃より不登校になりました。当時思っていたことは、学校に行き嫌な思いをするのに、なぜ眠たい中、わざわざ朝起きて学校に行くのだろうかという疑問でした。その疑問を思うと、だんだん学校に行けなくなりました。母親は小学校の先生で、僕を教育支援センターに連れて行き、カウンセリングなどを受けさせました。そのときに、「学校に行きたくなかったら行かなくてもいいよ」と言われ、学校に行くのをやめたように思います。それ以降、両親も同居する祖父母も学校に行きなさいと言うことはなかったです。それでも、小学6年生の時は学校に行けると思った日は時々行っていました。

2.中学生の頃

中学生になると、環境も少し新しくなります。心機一転、入学直後は頑張って、毎日朝から通学していました。ところが9月頃に体育の柔道の授業が嫌だと思って1回休んだのをきっかけに、また行けなくなりました。行ったり行けなかったりを繰り返して、中学3年生のときは午後から学校に行き、その後友達の家で遊んで、夕方帰るようになりました。

学校に行かなくなると、成績は落ちました。特に、数学のような正解・不正解がはっきりする科目はほとんど点数がとれなくなりました。それでも、大学進学を父が希望していたこともあり、ぼんやりと高校-大学という進学のイメージはありました。ただ、高校入試の日は朝起きられず欠席し、進路未定のままでした。そんな時に、担任の先生から定時制高校の紹介があり、受験・合格し、進学することになりました。

3.高校生の頃

定時制高校は卒業までに4年かかりますが、僕が通った高校は通信制を活用すれば3年で卒業できる場所でした。高校で不登校にならなかったのは、学校が17時45分開始のため、朝起きるのがしんどい、通学がしんどい、学校で過ごすのがしんどい…といった、しんどい連鎖の最初がなくなるのが大きかったと思います。また、隣の市にある高校まで家族が車で送迎してくれ、通学のしんどさもなかったのも大きかったです。ただ、高校でも総体で他校に行くなど、いつもと違う日というのは嫌で、そのときは学校を休んでいました。

定時制では、昼間アルバイトや仕事をしている学生もいます。僕の場合は大学進学を考えていたので、高校2年生の頃から午後予備校に行き、その後、定時制高校に通学していました。定時制の定期試験は簡単で内申点はよく、偏差値は平均以下だったと思いますが、大学には推薦入試で合格することができました。

4.大学生以降

大学（文学部哲学科）1年生の時は、朝起きられなかったり、授業になじめなかったりとならず、ほとんど単位がとれませんでした。しかし、大学の夜間コースに科目の単位互換があったので、夜間コースの科目の単位をとりながら4年間で大学を卒業できました。

大学院での研究分野は情報学です。大学2年生のとき、父親が仕事の関係で初級システムアドミニ

ストレータ（現ITパスポート）の受験勉強をしており、自分も一緒に受験し合格し、その後、基本情報処理技術者にも合格できました。その経験もあって、コンピュータの世界でやってみようと思いました。大学院の博士課程では、研究室の指導教員との関係がうまくいかず、うつ病と診断され博士号はあきらめて研究室を変えました。新しい研究室は僕にあっていて、もう一度頑張ってみようと思ひ、博士号を取得することができました。

その後は大学教員の仕事につき、今に至ります。大学教員は朝起きて決まった時間に行く仕事ではないので、自分のペースを保ちやすく向いています。これまでを振り返ると、不登校が解決して順調に行っているというよりは、波を繰り返しながら徐々に良くなっているというような感じです。

5.不登校の経験を通して思うこと

父親は僕をよく褒める方で、就職するまで金銭的な支援は惜しみなくしてくれました。母親は僕に専門家のカウンセリングを受けさせてくれました。また、僕は小さな頃からおじいちゃん子でした。日中、両親は仕事で不在なので、二世帯住宅に住む祖父母と過ごし、そこに居場所があることで、両親とほどほどの距離をキープできていたのかもしれない。

これまでを振り返ると、僕の特性の表れ方の一つが不登校だったように思います。不登校自体はあまり問題に思っていない。ただ、勉強の機会や社会との関わりなどが減って、将来の可能性が狭くなるという問題はあるように思います。なので、もし今、学校に行けるのであれば、学校に行っただ方が良いと思います。それでも、どうしても学校に行けないのであれば、学校に行くのをあきらめて、他の選択をとれば良いと思います。

不登校で悩むよりも、将来の可能性を狭くしないためにどうすればよいかで悩んだ方がよいのかなと思います。今は良い時代で、YouTubeやオンライン講座など、いくらでも勉強できる環境が整っています。社会と関わることも学校だけではありません。そう考えると、不登校になっても将来はなんとかなるのかなと思います。

ところで、今、小学2年生の子どもがいるのですが、学校が楽しいと言いながら毎日休まずに行っており、感心しています。・・・というところまでこの体験談を書き終わって、僕の文章を読んだ妻が、「ぜんぜん私が登場しない」と言っていました。改めて振り返ると、今、妻と子どもがいるのですが、波のある僕と違って安定した日常を過ごしており、僕のペースメーカーのようになっています。あたり前に思っている家族との日常が僕の支えであり、その大切さに今回文章を書きながら気がつきました。



不登校期間：小学4年生から中学3年生まで
現在：大学教員